

京都大学	博士(文学)	氏名	土 屋 京 子
論文題目	E. T. A. ホフマンの文学における動物表象		
(論文内容の要旨) ドイツ・ロマン主義の作家E. T. A. ホフマン(1776-1822)の作品には、動物のモチーフがしばしば現れる。だがそれにもかかわらず、従来のホフマン研究において、この点を包括的に論じたものは、ごく少数にとどまっている。その理由として考えられるのは、動物がとりわけ重要な役割を果たす彼の晩年の作品『牡猫ムルの人生観』(1819/1821)と『蚤の親方』(1822)が、これまでもっぱら諷刺小説として読まれてきたことである。だがホフマンは、その最初の短編集である『カロー風幻想作品集』(1814/1815)のなかで、この作品集全体を貫く精神は、「人間らしいものを動物と衝突させる」ことによって、人間の認識に揺さぶりをかけ、人間存在の実相を開示して見せることであると述べている。こうして人間存在とその営為を相対化するホフマンの動物表象には、18世紀以降の啓蒙主義によって提起された人間と動物とのあいだの関係にまつわる問題と、文学的な思考によってそれに応答したロマン主義の自然観が投影されており、そこには、現代における動物をめぐる議論にまで繋がるようなアクチュアルな視点を見ることができる。(序章) 『カロー風幻想作品集』に収録された『犬のベルガンサの運命にまつわる最新情報』(1814)と『教養ある若者についての報告』(1814)、そして晩年の長編小説『牡猫ムルの人生観』に登場する動物たちが用いる言語は、18世紀の言語起源論における様々な言説を反映している。フランスのフィロゾーフを中心にした啓蒙主義の思想家たちが、動物が発する「感情の叫び」としての「自然言語」へと立ち返り、ロマン主義の詩人たちが、自然を象った象形文字に言語の理想的起源を見たように、ホフマンは想像力によって生みだされる動物の言語から、人間の言語の本質を明らかにしようとした。『犬のベルガンサの運命にまつわる最新情報』において、神から授かった言葉を話す犬ベルガンサは、キリスト教の伝統的な言語観である言語神授説をパロディ化している。またベルガンサの言語は、自然と人間との対話を可能にするロマン主義的な「ポエジー」へと昇華される。他方、『教養ある若者についての報告』の猿ミロが学ぶ言語は、言語教育によって猿も人間になれると論じた唯物論者ラ・メトリなどの言語観を反映し、技術的あるいは道具的なものへと還元されている。ベルガンサとミロが人間とのコミュニケーションのために言語を習得したのに対して、『牡猫ムルの人生観』の猫ムルは、自己研鑽のために読み書きを習得する。こうして三者三様のかたちで言葉を操る動物たちの姿は、人間性の表出としての言語について、読者に再考を促しているのである。(第1章)			

『夜景作品集』(1816/17)に収録された短編小説『廃屋』(1817)では、18世紀後半から19世紀初頭にかけてヨーロッパ全体を席捲していた動物磁気説と、それによって覚醒する超感覚がテーマになっている。この物語の外枠にあたる三人の男の会話では、特別な人間が超自然現象を感知する「第六感」がコウモリ感覚に擬えられ、物語の枠内では、「スパンツァーニのコウモリ」と呼ばれる語り手テオドルが、ある廃屋で起こる怪奇現象について報告する。さらに物語の分岐点にあたる夜会では、G.H. シューベルトやクルーゲなどによる動物磁気説の自然哲学的解釈が紹介され、無意識の領域で自己を探究する人間の姿が、嗅覚や聴覚、体性感覚をたよりに地中を掘り進むモグラに擬えられる。このようにしてこの作品では、啓蒙主義の時代に議論された感覚論とロマン主義自然哲学の思想を受容しながら、動物がもつ特有の感覚と人間の超感覚を重ねあわせることによって、不可視の領域の因果関係を解き明かそうとする試みが、文学空間のなかでなされている。(第2章)

矮小な害虫としての否定的なイメージからほとんど顧みられることのなかった蚤や虱といった極小動物は、17世紀における顕微鏡を用いた微生物世界発見によるパラダイム転換をへて、さまざまな文献上に姿を現す。神秘的な昆虫の姿態は、神なる自然の恩寵の顕われとして理想視され、またミクロの世界は、自然科学の栄光と神の全能が共存する場として賛美される。ホフマンの晩年の作品『ハイマトカーレ』(1819)と『蚤の親方』(1822)は、自然科学の胎動期の形態である博物学を主題とし、人間と自然とのあるべき関係を問いかけている。『ハイマトカーレ』では、未開の地を探索する主人公の自然観察者と、彼によって新しく発見された虱との関係を通して、知の体系によって自然を分節化し、人間の精神的支配下に置こうとした博物学の理念そのものが批判されている。他方、メルヒェンとして構想された『蚤の親方』では、科学の発展によって刻一刻と変化していく時代のなかで、人間性を保ちながら生きていくためにはどうすればいいのか、という問題が扱われる。それゆえこの物語の主人公は、芸術家や科学者といった特別な役割を与えられておらず、はじめは一人の社会不適合者であり、博物学のシンボルである蚤とのあいだに相互関係を築きながら、人間としての健全な感覚と自己認識を育みつつ成長してゆくのである。(第3章)

言語とともに、人間性に輪郭を与えてきた理性と悟性、そして動物性を象徴する本能は、ホフマンの作品でも人間と動物のあり方の相違として、重要な意味を与えられている。とりわけ『牡猫ムルの人生観』は、動物と人間の視点が入れ代りながら、相互の立場から動物の認識能力の可能性について言及することによって、長らく人間の特性だと考えられてきた理性と悟性について再検討するように促している。アリストテレス以来、理性と本能とは、人間と動物という二項対立的な理解から論じられてきたが、この作品では人間の理性的能力に懐疑を示す猫によって、理性の優位が相対化されると同時に、理性と本能という二項対立図式そのものに批判が向けられる。その一方で悟性は、人間と動物に共有される認識能力として位置づけられ、両者のあいだ

の相互理解の可能性を暗示している。だがそもそも、人間に類似した認識能力が動物にもあるのかと問う行為自体が、人間中心主義的な思考形式に支配されていることを、この物語は気づかせてくれる。すなわち、人間の言語を理解する悟性をもちながらも人間に対しては沈黙し、自分の能力を隠して立ち振舞う猫ムルの姿を通して、他者である動物と人間とのあいだの関係のあり方が、ここでは問われているのである。(第4章)

ホフマンの代表作『黄金の壺』(1814)は、アンゼルスというごく平凡な青年を主人公にした物語である。だがアンゼルスは、火の精リントホルストの娘であり、蛇の姿で現れるゼルペンティーナとの遭遇によって、最後には詩人の理想郷へと到達する。ゼルペンティーナの蛇としての特性は、旧約聖書の『創世記』と、中世ヨーロッパのメリュジーヌ伝承の系譜のなかに位置づけられる。また当時西欧に紹介された東洋神話『バガヴァッド・ギーター』の教えが、作品内で言及されることによって、この三つの神話を支えている精神、「認識すること」、「信じること」、「愛すること」が、『黄金の壺』の世界観を形づくっていることが明らかになる。この三つの理念は、ゼルペンティーナを中心とする「新しい神話」として書かれたこの創作メルヒェン全体を貫いている。蛇の姿をとるゼルペンティーナの霊的な存在は、はじめは声によって示されるが、次第に主人公が羊皮紙の上に書く文字として現れ、さらには理想的な女へと変貌を遂げる。彼女の姿を聴覚や視覚によって感じとり、さらに文字となった彼女を繰り返しなぞることによって、アンゼルスは、口承から書承をへて創作へと発展する、文学の歴史を体全体で感じとる。ゼルペンティーナと霊肉ともに合一することで、アンゼルスは三つの神話の理念を胸に抱き、詩人としての自己認識を獲得するのである。(第5章)

ホフマンは、近代的自伝の端緒であるルソーの『告白』を熱狂的に受容した文学者のひとりである。だが、彼の様々な作品に姿を現し、彼の文学的分身であると理解されている芸術家クライスラーが、現実と理想のあいだで自己分裂をきたし、一貫した自我を形成できなかったように、ホフマンは自我の連続性を語る自伝という文学ジャンルに、常に疑いの眼差しを向けていた。晩年のホフマンは、『告白』に対してさらに距離をとるようになる。そのような精神から生みだされた作品が、『牡猫ムルの人生観』である。猫ムルが書いた自伝と、クライスラーの伝記とが、交互に入れ代りながら展開するこの長編小説では、ルソーの『告白』のなかの有名なエピソードがパロディ化され、批判的に扱われている。また、動物の自伝がその誕生から死に至るまで、一貫した流れをもっているのに対して、クライスラーの伝記は時系列どおりに話が展開せず、所々欠損し、断片となっている。動物と人間の生のあり方、あるいは人間の記憶の諸相を体現しているこの二つの伝記を対照させると、人間が自らの存在を位置づける際の、自己認識にまつわる問題が浮きぼりになるのである。(第6章)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ドイツ・ロマン主義の作家 E. T. A. ホフマン (1776-1822) の文学における動物表象の役割について考察したものである。ホフマンの作品には、多くの動物たちが登場するにもかかわらず、従来の研究において、こうした動物たちは、同時代の社会を諷刺するための手段にすぎないとみなされてきた。それに対して論者は、ホフマンの文学における動物表象には、人間と動物とのあいだの関係をめぐる 18 世紀啓蒙主義の思想と、文学的想像力によってそれに応答したロマン主義の自然観が影をおとしていると主張する。伝統的なキリスト教的世界像の相対化と、自然科学上の新たな発見にともなって、18 世紀以降の西洋の思想家や文学者たちは、人間と動物とのあいだの連続性と非連続性について再考する必要に迫られた。ホフマンは、こうした問題意識を受けついで、それを文学的虚構の世界に移しかえたというのである。

本論文の第一の特色は、ホフマンの文学における動物表象を、18 世紀以降の西洋思想のコンテクストのなかで読みなおそうとしたことである。第 1 章では、人間の言葉を習得した動物たちが登場する 3 篇の作品が、フランス啓蒙主義からヘルダーをへてドイツ・ロマン主義へといたる言語起源論の展開を背景にして読み解かれる。神から授かった言葉を話す『犬のベルガンサの運命にまつわる最新情報』(1814) の犬ベルガンサは、キリスト教の伝統的な言語観である言語神授説を相対化すると同時に、人間と自然との対話を可能にするロマン主義的なポエジーを体現している。美学教授から言葉を教えこまれる『教養ある若者についての報告』(1814) の猿ミロは、言語の動物的起源を主張したフランス啓蒙主義の思想を反映するとともに、そこには同時代の形骸化した言語や芸術に対するホフマンの批判がこめられている。他方、独力で読み書きを学びながら、人間に対しては沈黙を守る『牡猫ムルの人生観』(1819/1821) の猫ムルは、動物の言語と人間の言語とのあいだの断絶を浮きぼりにする。こうしてホフマンは、言語起源論の様々な論点を自らの作品のなかに取りこみ、動物に言葉を操らせることによって、人間性の表出としての言語について、読者に再考を促そうとしたというのである。

第 4 章では、あらためて『牡猫ムルの人生観』が論じられる。牡猫ムルの自伝と音楽家クライスラーの伝記が交互に配列されたこの作品にかんする従来の研究では、ロマン主義的芸術家の典型としてのクライスラーにもつばら焦点が当てられ、猫ムルは、芸術の本質を理解しない俗物の戯画とみなされる傾向が強かった。それに対して論者は、この作品から動物の認識能力にまつわる問題を読みとろうとする。人間の理性と動物の本能を対置する伝統的な動物観に対して、この作品では猫ムルが悟性をもつとされている点を重視する論者は、それによってホフマンは、人間と動物とのあいだの相互理解の可能性を示唆しようとしたと主張する。だがそれにもかかわらず、ムルは人間に対して沈黙を守り、人間と動物とのあいだの対話は実現しない。論者によると、ここには、動物にも人間に似た認識能力を認めようとする行為自体が、動物を擬人化

することによって、人間中心主義的な思考に支配されているという問題意識が表れているという。それゆえにこそ、人間の言葉を理解しながら、人間に対してそれを隠すことによって、ムルは動物としての自律性を守ろうとするのである。このようにして、ホフマンの作品における動物表象を、18世紀以降の西洋における動物観、人間観に対する文学の側からの応答の試みとして捉えなおした点は、従来のホフマン研究には見られない本論文のすぐれた着眼として、高く評価することができる。

本論文のもう一つの特色は、動物表象に着目することによって、ホフマンの文学作品に新しい解釈をほどこした点である。短編『廃屋』(1817)を論じた第2章で、論者は、この作品のなかに現れるモグラとコウモリの表象を、G.H. シューベルトやクルーゲの動物磁気の理論と関連させて考察し、無意識の領域で自己を探究する人間が、嗅覚や聴覚、触覚をたよりに地中を掘り進むモグラに、超自然現象を感知する能力をそなえた人間が、五感を超える感覚をもつコウモリに擬えられていることを明らかにする。こうしてこの作品は、西洋近代における視覚重視の傾向に抗して、動物がもつ特有の感覚を手がかりにして、目に見えないものを知覚する新たな認識能力の可能性を模索する試みとして位置づけられる。また、メルヒェン『黄金の壺』(1814)を取り上げた第5章で、論者は、主人公アンゼルスと結ばれ、彼を詩人の理想郷へと導くゼルペンティーナが、なぜ蛇の姿をとって現れるのか、という問いを出発点にして、ゼルペンティーナの存在が、最初は声によって示され、次に主人公が羊皮紙の上を書く文字と重ねあわされ、最後に美しい女性へと変貌する点に着目する。論者によると、ゼルペンティーナのこの変容は、口承から書承をへて詩人の創作へといった文学の歴史と軌を一にしているという。こうして、「新しい時代のメルヒェン」という副題をもつこの作品は、メルヒェンという文学ジャンルの歴史的変遷を主題とするメタ・メルヒェンとして読みなおされるのである。虱と蚤がそれぞれ重要な役割を演じる『ハイマトカーレ』(1819)と『蚤の親方』(1822)を、ホフマンの自然科学批判という視点から論じた第3章、『牡猫ムルの人生観』におけるルソーの『告白』の受容を検証した第6章もあわせて、本論文において提示されている作品解釈はいずれも、ホフマン研究に新たな知見をもたらす貴重な研究成果である。

とはいえむろん本論文にも、欠点がないわけではない。18世紀フランス思想にかんする論者の理解には、まだ不十分な点がある。ヘルダーとホフマンとの関係についても、さらに立ち入った考察が望まれる。また、論旨の展開にやや慎重さを欠く箇所が散見される。だが、こうした点も、本論文の学術的価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2013年2月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。